

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520385

研究課題名(和文) 調和文法に基づいた印欧諸語の曲用パラダイムの共時的変異及び通時的変化の統合的研究

研究課題名(英文) A Synchronic and Diachronic Study of Declension Paradigms in the Indo-European Languages on the Basis of Harmonic Grammar

研究代表者

中村 渉(Nakamura, Wataru)

東北大学・高等教育開発推進センター・准教授

研究者番号：90293117

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：印欧諸語(例：ドイツ語、古英語、古フリジア語)の曲用パラダイムの通言語的変異を人称・数・性・格の4つの次元に関する有標性制約及び忠実性制約の交互作用(最適性理論であれば、制約の相対的ランキング、調和文法であれば、制約の数値的重み付け)から派生できることに部分的に示した。更に、ドイツ語の冠詞類と形容詞類の曲用パラダイムの研究を通じて、名詞・形容詞類・冠詞類のパラダイム群が相互補完的に機能していることを示し、曲用パラダイムを名詞句の構成要素である名詞、形容詞、冠詞毎に個別に導くのではなく、名詞句において生じる構文的現象として分析することを提案した。

研究成果の概要(英文)：This research has shown that it is possible to derive the typological variations among declensional paradigms in a limited range of Indo-European languages (e.g. German, Old English, Old Frisian) from the interaction among a set of markedness and faithfulness constraints (constraint ranking in Optimality Theory and numeral weighting of constraints in Harmonic Grammar). Furthermore, this research has shown through the study of the declensional paradigms in German that paradigms of nouns, adjectives, and articles work in tandem and has proposed to treat the declensional paradigms as constructional phenomena observed in noun phrases.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：最適性理論 調和文法 形態論 曲用 パラダイム 屈折

1. 研究開始当初の背景

個別の印欧語の曲用パラダイムの研究は数多く存在するが、印欧諸語に見られる曲用パラダイムの多様性を類型論的な視点から体系的に解明する研究は従来少なかった。

2. 研究の目的

印欧諸語の曲用パラダイムの通言語的多様性を数・性・格に関する有標性制約及び忠実性制約の交互作用から導く。

3. 研究の方法

記述的・類型論的な研究手法を主に採用する。具体的には、印欧語族に属する各言語の文献資料から、曲用パラダイムを收拾すると共に、曲用パラダイムの多様性を可能な限り、少数の普遍的制約群の交互作用から導くことができるように、制約間の交互作用を捉えて、言語の多様性を導くフォーマリズムとして調和文法（最適性理論）を採用した。

4. 研究成果

印欧諸語（例：ドイツ語、古英語、古フリジア語）の曲用パラダイムの通言語的変異を数・性・格（ジェンダー）の3つの次元に関する有標性制約及び忠実性制約の交互作用（最適性理論であれば、制約の相対的ランキング、調和文法であれば、制約の数値的重み付け）から派生できることを部分的に示した。これは、曲用パラダイムの変異が、経済性（economy）及び類像性（iconicity）という2つの機能的動機づけの競合の産物として分析できる可能性があることを示している。数・格・性（ジェンダー）の有標性階層から派生される普遍的・言語特定の有標性制約群及び有標性制約に対抗する普遍的な忠実性制約群は以下の通りである。

- (1) 性・数・格に関する有標性階層
 - a. 性（ジェンダー）階層
男性 [Masc] < 女性 [Fem] < 中性 [Neut]
 - b. 数階層
単数 [Sing] < 複数 [Plural] (< 両数 [Dual])
 - c. 格階層
主格 [Nom] □ 与格 [Dat] < 対格 [Acc] / 能格 [Erg] < 属格 [Gen]
- (2) 性・数・格に関する有標性制約
 - a. 1. *{Neut}
 - 2. *{Neut, Fem}
 - b. *{Plural}
 - c. 1. *{Gen}
 - 2. *{Gen, Acc}
 - 3. *{Gen, Acc, Dat}
- (3) 性・数・格に関する忠実性制約
(IDENT-IO, MAX-IO)
 - a. IDENT [Gender],

IDENT [Number]

IDENT [Case]

- b. MAX [Gender],
MAX [Number],
MAX [Number]

(4) 有標性制約の制約結合（例）

- a. *{Gen} & *{Neut, Fem}
- b. *{Gen, Acc, Dat} & *{Neut}
- c. *{Neut, Fem} & *{Plural}

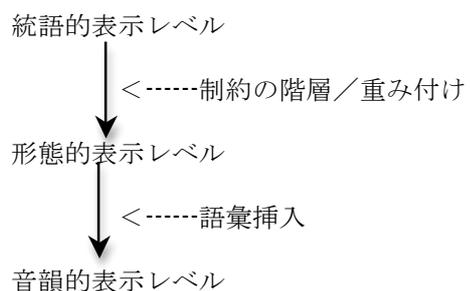
(4)は有標性制約の一種であるが、結合された複数の有標性制約に対する違反が同時に発生した場合にのみ、違反したことになる制約であり、局所的結合（local conjunction）と呼ばれる。この複合的有標性制約群は、言語特定の形成されるものであり、(2)の普遍的な有標性制約群と共に、(3)の忠実性制約群と競合関係にある。(1)~(4)の制約群は言語特定の制約のランキング（最適性理論を採用する場合）の対象となるか、言語特定の重み付け（調和文法を採用する場合）を受けることになる。

次に、(1)~(4)の有標性制約・忠実性制約は統語的表示レベルと形態的表示レベルのインターフェイスに適用される。具体的には、名詞類の曲用パラダイムを構成する性・数・格という3次元は統語的素性と形態的素性の両面を持ち、上記の制約群は統語的素性が形態的素性に写像される際に適用される。

具体的には、統語的素性は普遍的に与えられるため、性（男性・女性・中性）の区別、数（単数・複数・両数）の区別、格（主格・対格・与格・属格）の統語的区別は普遍的に存在するが、この統語的素性が形態的素性に写像される際、統語的素性を維持することを命じる忠実性制約の上位にランクされる有標性制約の効力により、統語的には存在している区別が形態的には消失する融合現象が起きると考える。

さらに、分散形態論に倣い、語彙挿入は形態的表示レベルから音韻的表示レベルへの写像が起きる際に起きるという「後期挿入」原則を採用する。上記の統語的表示レベル、形態的表示レベル、音韻的表示レベルの間の相互関係は図1のように図示できる。

図1：統語部門・形態部門・音韻部門間の写像



「後期挿入」原則の採用により、統語的素性から形態的素性への写像過程における一般化を確保することが可能になっている。融合現象には、以下の2種類の下位タイプがあるが、そのどちらも上記の2段階の写像により導くことが可能である。

(5) 自然類融合 (Natural class syncretism)

- a. 同じ形態音韻形式を持つ複数のセルが2つの素性値 (例: 単数&女性) を共有し、残る1つの素性で対立する場合 (例: 与格⇔属格), 有標的素性値を無標的素性値に代える。
- b. 非該当的融合 (Elsewhere syncretism) 同じ形態音韻形式を持つ複数のセルが共有する素性値が0~1つの場合, セルの素性複合は変えず, 共有されない素性を不完全指定した語彙項目により融合を導く。

また、ドイツ語の冠詞類と形容詞類の曲用パラダイムの研究を通じて、名詞・形容詞類・冠詞類のパラダイム群が相互補完的に機能していることを例証した。これは、たとえば、名詞、形容詞、冠詞から構成される名詞句において、格の区別を名詞、形容詞、冠詞の全パラダイムで明示する必要はないと言うことであり、形態論に属する曲用パラダイムを研究する際も、曲用パラダイムを名詞句の構成要素である名詞、形容詞、冠詞毎に個別に導くのではなく、名詞句という統語的領域において成立する構文的現象として分析する必要があることを示している。

最後に、曲用パラダイムの通時的変化について、有標性制約が忠実性制約の上位にランクされることから生じる融合現象であると暫定的に仮定して研究を進めたが、その通りに分析することが可能な場合でも、たとえば、格の区別 (例: 与格と属格の区別) が格融合により消失する場合でも、どちらの標識が融合の発生後に用いられるかについて考察を深めることが今後の課題として残った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2件)

1) Wataru Nakamura, “Functional/Absolute Case Syncretism: An RRG Account and Its Extension to Contextual Syncretism”, *Proceedings of the 10th International Conference on Role and Reference Grammar*, 203-227, 2010. [査読無]

2) 中村 渉 「「所有の属格」対「否定／内包の属格」: 類似性による動機づけ」『日本認知言語学会論文集, 第12巻, 202-210, 2012. [査読無]

[学会発表] (計 6件)

1) Wataru Nakamura, “The Second Dative in Russian: A Case for the Last-Resort Case Assignment,” The 12th International Conference on Role and Reference Grammar (Freiburg, Germany), August 1, 2013.

2) 中村 渉 「目的語格標示の変異: 有標性同化による記述」 *Morphology and Lexicon Forum 2012* (東北大学), 2012年9月22日.

3) 中村 渉 「所有の属格」対「否定／内包の属格」: 類似性による動機づけ」日本認知言語学会 第12回大会 (奈良教育大学), 2011年9月18日.

4) 中村 渉 「古英語における限定詞のパラダイム」日本言語学会 第141回大会 (東北大学), 2010年11月28日.

5) Wataru Nakamura, “Morphological Syncretism in Declension Paradigms,” Conference on Competing Motivations (Leipzig, Germany), November 23, 2010.

6) Wataru Nakamura, “Describing Inflectional Paradigms with No Feature Decomposition,” The 14th International Morphology Meeting (Budapest, Hungary), May 15, 2010.

[図書] (計 1件)

Wataru Nakamura (ed.), *New Perspectives in Role and Reference Grammar*, Cambridge Scholars Publishing, 2011.

ページ数: 375 ページ

[産業財産権]

○出願状況 (計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
該当無し

6. 研究組織

(1) 中村 渉 (NAKAMURA, Wataru)
東北大学・高等教育開発推進センター・
准教授
研究者番号：90293117

(2) 研究分担者 該当無し
()

研究者番号：

(3) 連携研究者 該当無し
()

研究者番号：